



『今日から俺が親分やで!』

そんな事を言われながら屋敷に連れて来られたロマ
ーノは、正直バカバカしいとしか思えなかった。

じいちゃんが残してくれた、僅かな遺産くらいしか
誇れるモノもなく、全く役に立たないと云つても過
言ではない。

利用価値さえない事を、誰よりも分かっている手前、
すぐに手放されると思っていた。

だからこそ、安易に近づく事も避け、無駄な反発を
繰り返していた。

不器用なあまり片付けさえ満足に出来ず、何度も怒
られ、ため息を零される度、一層の事、追い出して
くれた方が楽なのにとさえ思う日も多かった。

しかし、ロマーノの願いと裏腹に、周囲の状況は
大きく変わり果て、フランスと小競り合いをしてい
たスペインは、ついにトルコと戦い始めてしまった。
帰ってくる度に血塗れになっているスペインに、そ
の原因を作っているのが自分だと理解しているもの
のが、そこまでして守ってもらわぬ価値がないと思
い耽ると、更に居た堪れなさが増していく。

数年をかけてトルコを返り討ちにしたスペインに、
ロマーノは初めて謝礼を言葉にする事が出来た。

しかし、トルコとの戦いは損害も大きく、毎日のよ
うに上司に怒られているスペインを見かける度に、
理解し難い感情が大きく揺らぐばかりだった。

「今日も説教ばかりやったなあ」

寝る準備を始めていたスペインは、上着を脱ぎ捨て
ながら、嘆息めいた吐息を零していた。

部屋の前で、その声を耳にしたロマーノは、意を決
したように戸口を押し開いた。

物音に導かれるように振り返ったスペインは、枕を
抱えたまま部屋に入ってくるロマーノに、優しげな
笑みで迎えた。

「ロマーノ? どうしたん、寝られへんの?」

話しやすいように少しだけ腰を落としたスペインは、
いつもと変わらない微笑みを向けてくれるものの、
複雑な心情が混濁していくロマーノは、ずっと頭に
引っかかっている疑問を口にするのが関の山だった。
「な・・・なんで、助けたんだよ!」

今にも泣きそうな顔で見上げてくるロマーノに、思

わず目を白黒させたスペインは、上半身だけでも無数の傷跡が刻まれている。

それを見ているのも辛くて、緩々と顔を俯かせていくロマーノだったが、それを吹き飛ばすように、鮮やかに微笑んだスペインは、迷う事なく口を開いた。

「親分やもん、当然やで！」

何でもない事のように言い切ったスペインに、じわりと視界が霞んだロマーノは、次々に溢れてくる涙を止められなかった。

何も出来なくても、居場所を確保してくれているように、歓喜が大きくなる反面、そのせいで被害をもたらした事が、胸を締め付けてやまない。

とめどなく流れる涙を拭いてもせず、スペインに体当たりしたロマーノは、そのまま小さな拳を振り回し始めた。

「コノヤロ〜！」

紅葉のような可愛い手で叩かれたところで、大した痛みはないが、治りかけの傷に当たるのだけは避けなかった。

「ロ、ロマーノ？」

慌てて受け止めようと両手を伸ばした時、掠れた声で耳元を掠めていった。

「い、いつばい：怪我して、金も、なくなつて・・」
口にするのも耐え難い心情を、必死に押し出しているロマーノだったが、零れ落ちる声は酷く震えていた。

どんなに上司に怒られようとも、自分がした事は間違っていないかつたと確信したスペインは、感嘆の込めた声で呼びかけると、小さくて可愛い存在を、ゆつくりと抱き上げた。

「ロマーノ・・・」

ふわりと足元の感覚が消えていき、すぐ近くにスペインの顔が見えた時、抱え上げられたと気付いたロマーノだったが、直接接触合った素肌の温かさに凍りついてしまった。

しかし、そんな事を気にも留めないスペインは、嬉しそうに微笑むと、感極まった声を向けてくる。

「心配してくれてたん？親分めっちゃ嬉しいで〜」
腕の中にすっぽりと収まる小さな体を、軽く抱きしめたスペインは、歓喜で溢れる想いを、頬ずりに変えていく。

涙でぐちゃぐちゃになった頬でも、お構いなしにすり寄せてくるスペインに、慌てて我に返ったロマーノは、短い腕を精一杯伸ばして顔を引き離そうとす

る。

「なっ！は、離せよ、こんちくしよ〜！」

「恥ずかしさのあまり頬を赤らめたロマーノは、何とか飛び降りようと必死だったが、それさえ気付きもしなかったスペインに、軽々と支え直されてしまった。

「親分やったら大丈夫やで、なんとかなるって〜」大した事ではないと言いたげに、真っ直ぐに微笑まれたが、それを言葉通りに受け止められる程、ロマーノも単純ではない。

「本当か？」

「非難するように見上げてくる視線に、切羽詰った財政を見抜かれている気分が陥ったが、それを告げたところで、ロマーノが落ち込むのは、いくらスペインでも分かっている。

「少しだけ困ったように微笑んだスペインは、考える素振りを見せると、名案を思いついたように鮮やかに笑った。

「そやなく、ロマーノも手伝ってくれたら、親分もつと楽になるねんケドなく」

「普段から失敗ばかりしているせいか、強張った頬を更に硬くさせたロマーノは、緩々と顔を俯かせると、

掻き消えそうな声で呟いた。

「わ、分かった・・・」

「普段から簡単な手伝いしかしていないが、それも満身に出来た試しはない。

「だからこそ、自信はないと言いたげに両手を握り締めていくロマーノに、苦笑いを噛み殺したスペインは、少しからかい過ぎたと思う反面、珍しく素直で健気な様子が可愛く思えた。

「一緒に頑張ろうな♪」

「励ますように優しく囁いたスペインは、微かに震わせている可愛い頬に、静かに唇を近寄せると、ついでとばかりに、音が鳴るような可愛いキスを付け加えた。

「瞬く間に朱色に染まっていく頬を押さえつけたロマーノは、泡を食いながらもキスされたところを乱雑に拭くと、スペインの腕の中で暴れ始めた。

「こんちくしよ〜！」

「うわあつ、そなえ暴れたらっ」

「手足を大きく振り回しながら暴れ始めたロマーノは、スペインがバランスを崩した僅かの隙に、軽やかに腕の中から飛び降りた。

「最悪だ！コノヤロー！」

真つ赤な顔を背けたまま、部屋を飛び出していくロマーノに、足元に転がっていた枕を拾い上げてから追いかけたスペインは、戸口から暢気な口調を向けていく。

「ロマーノ、マクラ忘れとんで」

「うっせええ！」

満足な思考が果せない程、泡を食っているさえ知る由もないスペインは、迷う事なく自室に逃げ込んだロマーノを見届けると、のんびりと自室に戻った。

「どうしたんやろ？」

自分が原因である事など、気付く余地もなかったスペインは、軽く首を傾けながらも、ロマーノが置き去りにしていったマクラを軽く弾くと、室内のソファアの上に乘せた。

欠伸を零しながらベッドに潜り込んだスペインは、不意に柔らかい感触を思い出した。

「あゝ、キスしてもたから・・・？」

しかし、挨拶代わりのキスくらいで、過剰な反応するようにも思えず、気のせいだと思おう反面、今までそんな事をした記憶がないのも確かだった。

「まあ、エエか・・・」

睡魔が襲ってくる中、満足な思考も望めず、早々に

考える事を放棄したスペインは、数分後には穏やかな寝息を立て始めていた。